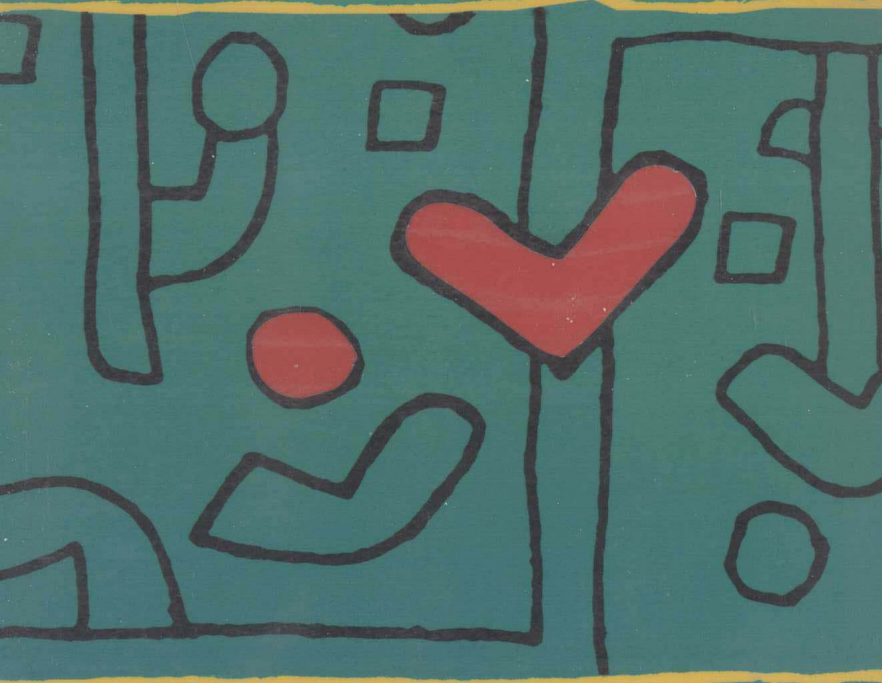
AMY SHOWS

【エイミー・ショウズ】



山田詠美

AMY YAMADA

◎
Amy Shows
◎

エイミー・ショウズ
山田詠美（やまだえいみ）

発行——1999年8月30日
発行者——佐藤隆信
発行所——株式会社新潮社
〒162-8711／東京都新宿区矢来町71
振替　00140-5-808
電話——編集部　03・3266・5411
読者係　03・3266・5111
印刷所——二光印刷株式会社
製本所——加藤製本株式会社
価格はカバーに表示してあります。

©*Eimi Yamada 1999, Printed in Japan*

ISBN4-10-366808-3 C0095

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Amy Shows

【エイミー・ショウズ】

山田詠美

Shinchosha

Amy Shows

◎

目次

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

◎Ⅰ◎

砂漠の熱き日々――インド 11
間違いだらけのクラブ選び――NY 35
神々の贈りもの――パリ 49
熱帯ポンちゃんが行く!――フィジー 57
歩くためだけの旅――京都 65
偶然を楽しみ尽くす――イタリア 72
あるリゾートのお楽しみ 79
私の楽園体験 83
RESERVED 86

◎Ⅱ◎

おせいさんへのラブレター 91
「僕」は「君」に問いかける 95
いとしい小説 99
幸福の裂け目 100
恋人の息子 103

恐怖ゆえの希望 110
美しい傷を持つ作家 112
シャンペンを抱えて 116
Cheers 120
タフ・ガールズのお話 126
週間読書日記 130
宮本輝（じい）様に関するいくつかの事柄 135
恐怖の「今こそ」 139

◎Ⅲ◎

偏見だらけの新人賞えらび・その1　小説現代新人賞・選評 149
偏見だらけの新人賞えらび・その2　文學界新人賞・選評 175

◎Ⅳ◎

性善説とプライド　林真理子『星に願いを』 219
人生をいつくしむ才能　田辺聖子『ジョゼと虎と魚たち』 226
大人には大人の悲しみ　森瑤子『ホテル・ストーリー』 233

動物になりきれないせつなさ　辻井喬『けもの道は暗い』238
すばらしきはったり屋　村上龍『ニューヨーク・シティ・マラソン』242
もしかしたら努力の人？　村上龍『すべての男は消耗品である』246
しなやかな作家の目　田辺聖子『花衣ぬぐやまつわる……』252
困った感じの魅力　安部譲二『塀の中の懲りない面々・2』257
「無印」という謙遜　群ようこ『無印OL物語』261
都会の目　景山民夫『休暇の土地』266
見て見ぬふりの美徳　藤堂志津子『ジョーカー』270
愉快な自己肯定　佐伯一麦『ア・ルース・ボーイ』275
Did You See That Moon?　景山民夫『普通の生活』281
人生に有効なおしゃれ　光野桃『おしゃれの視線』286
照れるけどいとおしい　原田宗典『十七歳だった！』291
郷愁を抱き締めることの出来る物語　森詠『オサムの朝』297
世にもシンプルな女優の存在感　黒木瞳『わたしが泣くとき』301
物書きのエレメント　花村萬月『笑う萬月』307
小説家の世界にようこそ　松野大介『芸人失格』311

Amy Shows

装幀　新潮社装幀室

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

砂漠の熱き日々――インド

暑い国々で心地良く過ごすには、まず日本人であるというのを忘れることである。色々と便利なものに囲まれて育って来たことが実はたいしたことではないのだと寛容になることである。そうやって、今まで心の中に染み込ませていた価値観を取り除いた後に、もうひとつ気を使うこと、それは、どんなにその国の文化に感動しても、その国の人々になり切ろうとは思わないことである。自分は決して、この国の人ではないという異和感が、いつも新鮮な驚きを心にもたらしてくれる。そして、驚きながらも、怠惰になることだ。暑い国では、どうしても物事がゆっくりと進む。人間の体というのは、そんなふうに出来ているもので、その自然の法則に逆らう必要は、まったくない。それに気付くと、日本は、ずいぶんと色々なことを急いでいる国なのだなあというのがよく解る。

今回のインド旅行も、飛行機の中で、自分をそういう方向に持って行こうとすることから始まった。短い滞在期間の中で、あれこれと観光名所を見る必要はない。初めて訪れるインドという国が、どんな匂いの空気を持っているのだろうかと、それだけ味わえば、い

いだろうという気軽な気持だった。デイパックを背負って歩きまわる旅行者になろうとは思わなかったし、お金持のツァリストのように、豪華な遺跡をガイドの後について熱心に見て歩こうとも思わなかった。(一応、来てくれたガイドの男性は、私があまりにも、ぼおっとしているので、あの、私の話を聞いているんですかと心配して尋ねていた。もちろん、私は、寺院の歴史的背景などを完璧に聞き逃して、空の色などばかりに気を引かれていた)カメラも忘れてきたし、まあ、いいか、と、肝心なことはすべて、同行してくださった編集者の方にまかせていた。

私は、暑い国が大好きだ。滞在している間に、自分の皮膚の色が変わって行くのが楽しくて仕様がない。それを楽しむために、よく肩や背中の開いた服を着る。それが、島のリゾートなら何の問題もないのだが、私は、ちゃんと東南アジアの街中でも、それをやってのけるので、周囲の人々は大ショックである。アジアの暑い国の女性はいつも日に灼けないように、あるいは慎しみ深くするために肌を隠している。だから、私が歩くと、それと同じ速さで、人々の視線は移動する。それは、もちろん感嘆して口笛を吹くたぐいのものではなく、一体、何が起ったのだというような驚愕の視線の大移動である。でも、人々は、なんとも可愛らしいことに、私が一向に意に介さずに振り返って歯を見せると、なんだ同類か、という調子で皆、一斉に笑い返す。

ニューデリー、オールドデリー市内を歩いた時も、そうだった。私にしてみれば非常に控え目な格好をしたつもりなのだが、誰もが驚いている。女性は、皆、サリーを着ているのだが、サリーというのは、おなかの周りの肌が完全に露出するような着方をする。だから、私のように少しでも背中を出して良いかというと、まったくそうではない。誰もが、私の背中を見て、息を飲む。日本だったら、おなかを出して歩く方が、ずっと「！」なのだが、ここでは違う。私は、人々の驚く様子を見て楽しくて仕方がなかった。彼らが、驚いても、決して、とがめてはいないというのが、伝わって来たからだ。暑い国の人々の感情は、とても読み取り易いから大好きだ。

インドには、美しい人が多い。女性でも、男性でも、だ。ただし、女性は太っている人が沢山いる。聞くところによると、ここでは、美人の条件として、太っているというのが入っているそうである。サリーの布から出たおなかに三本線が入っているのが最高だと聞いて、驚いた。私のように色の黒い人は、最初から美人の条件からははずされているらしい。なおかつ、私は、どう見ても日本人には見えないらしくて、ニューデリーのタジ・マハールホテルでは、インドネシア人と間違えられて、アンケートを取らされ、田舎に行くと、ニューデリーから来たインド人と間違えられ子供に囲まれるし、後半訪れることになる砂漠では、なんと、アフリカ人に間違えられた。彼らのイメージしている日本人とは、

どうやらまったく、かけ離れていたらしくて、おかしな質問をされるたびに絶句してしまった。

デリー市内に吹く風は、とても熱い。ただの熱さではなく空気が沸騰しているという感じだ。皮膚が乾くのではなく、じっとりと湿るような熱さである。暑さに弱い人にはお手上げという感じの熱い風だが、私には、こういうのがないと物足りない。色々な匂いの混じった濃密な空気が顔に吹きつけられると、あ、来た来たと、思う。体と心が、その土地を受け入れる態勢を整えて来た、と思うのだ。私は熱を含んだ空気が大好きだ。

熱い風の中で、サリーの色がとても華やかで美しい。街の色がくすんでいるために、原色の布地や耳飾りがよくはえる。同じ水で筆を洗いながら、時間をかけて描き上げた街並みに、新しい絵の具を落として行った感じ。デリーの街は、人々の動きが筆洗を取り替えていく一枚の絵のようである。私は、決して飽きずに道行く人を見ていた。

車でデリー市内を走って行くと、美しいばかりではない光景に出会う。物乞いの人々や、疲れ果てて、道路に寝そべる老人。体の不自由な人も多いし、蠅のたかっている子供たちもいる。車が止まると、窓ふきの少年がやって来て、勝手にフロントガラスを磨いて、お

金をせがむ。私は、これと同じ場面に、どこかで出会ったことがあると、思い出そうとする。無理矢理、新聞を売りつけて、いらないと断わるとトイレットペーパーにでもしなよと、欠けた歯を見せて笑う小さな男の子。そうだ、これは、ニューヨークと同じなのだ、と私は思う。今年、気に入って行き続けたニューヨークのサウスブロンクスと同じなのである。発展し過ぎて荒廃してしまった都市の一角と、発展途上で、まだ荒廃している街。この両極端の街の中で、人々は同じことをしているのである。ただし、デリーで、窓ふきを断わると少年たちは、仕方ないなあと、にっこり笑って見せるが、サウスブロンクスでは、そうは行かない。笑う代わりに、ハンマーを持ち出して、フロントガラスを叩いて見せたりするから油断も隙もあったものではない。文明も進み過ぎると、もとの形以下になってしまうのだなあと、つくづく感じた。同じことをしても、顔に屈託のない笑顔を浮かべているのと、すさみ切った表情を浮かべているのとでは大違いである。そういえば、ニューヨークにも、道端で寝ているホームレスピープルが沢山いたっけ。結果は同じでも、原因はまるで違う。だいたい、ここの人々は暑いから寝ているのだ。

車で走ると、オートリキシャと呼ばれるモーターサイクルを改造したタクシーの荒っぽい運転に、急ブレーキをかけることがしばしばである。どれもポップな色調にペイントしてあって、丁度、タイで見たトゥクトゥクという乗り物と同じである。のぞいて見ると、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb